



英文学会通信

第122号

— 日本大学英文学会 —



《ご挨拶》

副会長挨拶 日本大学英文学会副会長 隅田 朗彦 2

《特集》 英文学会に所属する先生方へのインタビュー

日本大学文理学部教授 閑田 朋子 日本大学文理学部英文学科4年 小澤 優月
 日本大学文理学部英文学科4年 田原 希優 3
 日本大学文理学部准教授 一條 祐哉 日本大学文理学部英文学科4年 鈴木 大翼
 日本大学文理学部英文学科4年 樋口 康平 6

《エッセイ》

エクセターから 日本大学国際関係学部准教授 杉本 宏昭 9

《検定試験奨学制度》

資格自体を目的にしない 日本大学文理学部英文学科4年 古畑 走 9

《海外留学体験記》

カナダ留学を終えるにあたって 日本大学文理学部英文学科4年 萩原絵理香 10
 英語で世界とつながる 日本大学文理学部英文学科3年 伊藤 大智 11

《新刊書案内》

英米文化学会編『比較文学で読む十一の出会い—交差する東西のまなざし』(勉誠社、2023年)
 日本大学文理学部教授 閑田 朋子 12

被害言説から逸脱する日系オースティンの語り：

カレン・テイ・ヤマシタ著・牧野理英訳『三世と多感』(小鳥遊書房、2023年)
 日本大学文理学部教授 牧野 理英 12

『Rによる教育・言語・心理系のためのデータサイエンス入門』(オーム社、2023年)

..... 法政大学理工学部准教授 柳川 浩三 13

《年次大会プログラム》

《年次大会発表要旨》

Heaven and Hell—Perkins, Milton and Overton 日本大学工学部准教授 川崎 和基 15

現代アメリカ演劇から見るアメリカ 日本大学国際関係学部教授 松本美千代 16

作文学習における訂正フィードバックの効果：文法エラーの属性による効果の影響

..... 日本大学文理学部教授 隅田 朗彦 16

〈最終講義〉 If節における認知的 will について (再び) 日本大学文理学部教授 吉良 文孝 17

《月例会関連》

《事務局だより》

《ご挨拶》

ご挨拶申し上げます

日本大学英文学会副会長 隅田 朗彦

皆様、この度はお忙しい中、学会通信をお読みくださいます。誠にありがとうございます。昨年と同じ時期に引き続き、再度ここで皆様にご挨拶申し上げますことができるのを大変光栄に感じております。

本年度はやっと様々なことがコロナ禍前とほぼ同じ状態に戻りました。おかげさまで、当学会の定例会、特別講演会、シンポジウム、そして年次大会も気兼ねなく対面開催できるようになりました。新型コロナウイルス感染症が2類から5類相当へと移行してから暫く経ったものの、昨年度は人々の警戒がまだしばらく続いていましたので、恐る恐る対面で物事が進められていた感がありました。しかし、今では大学の教室でも大半の学生さんのマスクのない顔を前に話すことができ、大変ありがたいなあと思います。今年度後学期の授業が始まって第1週目辺りは教室のほとんどの学生はマスクをしていませんでした。「おお、ついにノーマスク・フェイズに突入か」と思ったのですが、なぜか第2週目からマスク着用率が上がりました。何がそうさせたのでしょうか。少し涼しくなったのでマスクを暑苦しく感じなくなったからでしょうか。ともあれ、授業中の学生さんからのマスク越しの返答が減ったことで発言がととても聞き取り易くなり、やはり、ありがたいなあと感じていることには変わりありません。先日あるテレビドラマを観ておりましたら、新型コロナウイルスの落ち着いた後にまた似たような新型ウィルスのパンデミックが発生し、社会が混乱するというストーリーが展開されていました。油断は禁物ということでしょうか、何かに怯えながらの生活はもう続いてほしくないと思います。今やウィルスが落ち着いたと思ったら、今年は大地震や台風のダブルパンチ、トリプルパンチに見舞われるなど、天災に怯えなければならぬ日々を過ごされた方々も多かったことを考えると、そんな生活が否応なしにやってくるのではないかと心配になります。

さて、昨年、このご挨拶の中でAIが近年、私たちの生活や社会に多大な影響を与えるようになったお話をしました。学会通信前号の会長の挨拶にもAIに触れたお話がありました。私たちは、日々その進化を目の当たりにし、技術の可能性と限界を探る中で、その影響力の大きさに驚かされるばかりです。生成AIが人間のオーダーを聞いて自動的に生み出すものはテキストだけでなく、画像、音声、映像にまで発展しています。今やChatGPTを知らない人はいないという

勢いです。昨年は生成AIを「きせいAI」と読んでいたアナウンサーをテレビで見ましたが、おそらく「きせい」と読む人はもはやいないでしょう。私も事あるごとに生成AIにはお世話になっており、日々の教材の作成、英作文の添削、自身の英文や日本語のチェックなどを行っており、その便利さを享受しています。

ただ、生成AIはあくまで人間の補助をするものであり、人間の創造性や判断力に取って代わるものではないという視点も重要です。近年、若者が自主的に行動し、積極的に意見や疑問を発する姿勢がなくなっていると言われています。大学では学生が自分自身で課題を発見し、それに対して自ら取り組む姿勢が非常に重要視されます。しかし最近では、学生たちが受け身の姿勢になりがちで、授業や課題に対して受動的に対応するケースが増えているのだそうです。まあ、私が若者だった昔も若者は結構受け身な生活を送っていたので、「自ら取り組む姿勢はそのうちできるヨ」とも思うのですが、私が若者だった時と違うのは、身近にスマートフォンやAIがあることです。ただでさえ自主性とか積極性がないといわれているところへ、頼めば、なんでも、すぐに、それなりのクオリティでやってくれるAIという機械が投入されることで、ますます自分で考える機会は減ってしまうでしょう。さらに、スマホの普及でコミュニケーション能力や対話力の低下も懸念されています。ここ最近の大学の様子から感じられるのは、学生同士、おそらく、教員同士も対話の場で言葉を発することが本当に少なくなってきたことです。

冒頭でも触れましたが、コロナ禍が過ぎ、心置きなく対面でのディスカッションや議論ができる機会が戻ってきました。ぜひ、定例会や年次大会にお越しただいて、積極的に対話の場を活用していただきたくお願い申し上げます。また、約2年後には当学科創設100周年も迫っております。是非とも皆様の活発なご協力を賜りたく何卒お願い申し上げます。



《特集》

英文学会に所属する先生方への
インタビュー

第120号より新たな取り組みとして、「同窓会通信」(2017年3月より休刊)に掲載されていた特別企画を特集記事として英文学会通信に掲載することとなりました。本号の特集を編集するにあたり、多くの学生ボランティアが協力を名乗り出てくださいました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。これからも、インタビュー記事に限らず、会員のみなさんに現在の英文学科や英文学会の様子が伝わるような特集をお送りいたします。

閑田 朋子先生(日本大学文理学部教授)

インタビュアー：英文学科4年 小澤 優月
田原 希優

小澤：では、インタビューよろしくお願ひします。

田原：お願ひします。

小澤：文学を学ぶ上でおすすめの勉強法や、「文学でこれを中心に学んでおいた方がいいよ」など、学生へのアドバイスがあれば教えてください。

閑田先生：大切なのは、楽しむことです。物語を楽しむという点では、漫画も映画も文学も変わりません。様々な批評理論がありますが、すべての読書体験の最初の一步は、主人公が可哀想だったとか、はなしが面白かったなどの素朴な感想ではないかと思っています。みなさんも、世界中のたくさんの物語に触れて、それぞれの物語を楽しんでほしいと思います。

小澤：なるほど。本を読むのが苦手とか嫌いな学生も中にはいますよね。

田原、閑田先生：いますね。

小澤：私は本をおすすめされても、分厚い英文の本を見ると、それだけで「うわ、これを読むの!？」と思って、尻込みしてしまいます。私みたいな学生にも、おすすめの本とかはありますか？一度その世界に入ってしまうえば読めそうですが、最初のとっかかりはどうすればいいのでしょうか。

閑田先生：うーん・・・それは単に読み慣れてないだけかもしれませんね。漫画を読んだり、映画やテレビドラマを見たりして楽しいと思える人には、物語を

楽しむ素質がちゃんと備わっています。そういう人は、薄くて読みやすい本から初めてみてはどうでしょうか。いきなり全6巻といった大作を読もうとするとつらくなるので、興味のある分野の比較的シンプルな話から始めてみましょう。たとえば子供向けの本から始めてもいいと思います。一方で、漫画も映画もテレビドラマもダメ、という人は、「物語」や「文学」にこだわる必要もないと思いますよ。他にもいろいろな学問分野がありますから。

小澤：たしかにそうですね。授業などで読む文学作品には、和訳があることもあります。和訳本を読むことについてどう思いますか？

閑田先生：原作を読んだ方が良くは決まっていますし、実際にその方がこまやかな表現についてなど、様々な気付きがあります。だからと言って絶対に原作でなければだめ、というものでなく、第一、読めない言語の本は翻訳で読むしかありません。

小澤：でも、やっぱり和訳本と原作の表現だと、なんかこう、微妙な点とか色々違ってきているのでしょうか。

閑田先生：はい、その通りです。私は今、ある作品を訳していますが、英語のまま読めばさらっと読める易しい一文でも、頭を抱えてうんうん言いながら訳しています。「この訳とあの訳と、どちらがいいかな。これだと英語の原文に近いけれど日本語として不自然だし、だからと言って自然な日本語にすると今度は訳しすぎかも・・・」などなど。だから、翻訳を読む時には、一つの原文に対して複数の訳し方があって、それを作者ではなく訳者が選んでいる、ということを感じておいた方が良いでしょう。

ただし、英語で読んで1年かけて最初の一章しか読めなかった場合と、和訳で最後まで読んだ場合だと、どちらがその文学作品を深く理解できるのかと問われると、これは難しい問題です。私としては、両方を組み合わせて読むことをお勧めします。卒論で扱う作品はもちろん原作で読みますが、締め切りまでの限られた時間の中で、その作家と親しかった別の作家の作品や、同時代同分野の作品を幅広く読む必要がある場合は和訳に頼っても仕方がないところがあります。また、授業から離れて自分で本を読む場合は、「これでなければいけない」という読書方法はないと思っています。

田原：えーと、私からも質問させていただきます。英文学科だと本を読んでレポートやエッセイを書くことがよくあります。その時のポイントとか、ここを読んでこう書いた方がいいみたいなのコツがあれば教えて

いただきたいです。

閑田先生：それは難しい質問ですね！

田原、小澤：笑

閑田先生：レポートは、分量さえ多ければそれで良いわけではない、というところがポイントでしょうか。教員が出した課題と関係ないことを書くと、天下の名文をたくさん書いても、評価されません！ 日常生活でも「朝ごはんは何を食べたの？」と聞かれて、「昨晩はよく眠れたよ」とは答えたら、変ですよ。レポートも課題としての「問い」をよく理解して、それに答えることが大切です。

一方で自由課題の場合は、自分でこの「問い」自体を作って、それを明確にします。具体的には、レポートの頭で、このレポートはこれこれの「問い」に答えるために書かれているのだと説明してから、論を展開していきましょう。「問い」を明確にしておかないと、何を答えたらよいのか分からないので、思いつくままにあれも書いて、これも書いて、ということになって・・・もうめちゃくちゃ！

「問い」がはっきりしていると、レポートを書く上で作品のどこに注目したらよいのか、自然に分かってきます。例えば、ある小説について、「人はどのような場合になぜ争うのか」考えてみましょう、という問いであれば、風景描写にはあまり注目しませんよね。そのかわりに、人間関係が悪化していく発端や、争いが酷くなっていく過程を描いた箇所注目することになります。これは、レポートを書くときでも、卒論を書くときでも同じです。

田原：なるほど。では次に、閑田先生自身のことをお伺いします。今まで読んできた作品の中で1番印象に残っている作品とその理由を教えてください。思入れがある作品でも大丈夫です。

閑田先生：文学ではありませんが、『鼻行類』という本が印象に残っています。

田原：ピコウルイ???

閑田先生：鼻で行く類という漢字で、鼻行類です。この研究室のどこかに本がなかったかな。家に持って帰ってしまったかも。生物学の本です。

小澤、田原：生物学の本???

閑田先生：しかも嘘の本です。象は進化するにしたがって鼻が長くなったそうです。それであれば、鼻がもっと進化して、鼻で歩行したり捕食したりする生物

がいてもおかしくない、ということで、嘘みたいな、冗談みたいな話ですが、鼻行類という生物を考え出した人がいました。ゲロルフ・シュタイナーという人です。ただし、この書籍は、ハラルト・シュテュンプケという人が作成した、鼻行類についての調査報告書が元になっていて、シュテュンプケ氏が鼻行類の現地調査に行って行方不明になったので、その友人シュタイナーがまとめたもの、ということになっています。鼻行類もシュテュンプケ氏も実在しないのですがね。本当にいたのはシュタイナー氏だけですが、このシュタイナー氏は正真正銘、本物の生物学者だったので、『鼻行類』のなかで、解剖学とか分類学の知識に則って、進化の過程にまで及んで、相当緻密な論を展開しています。だから、多くの人が、鼻行類は本当に存在したと思ってしまったようです(笑)。しかも鼻行類が生息していた島は、核実験によって地殻が歪んだために、海の中に沈んだことになっています。これを信じた人もいて、東ドイツのある報道機関は、ある国の原爆実験のせいで、希少生物である鼻行類が絶滅してしまったことを、真剣に嘆いています。

小澤：すごいクオリティですね…。

閑田先生：そうなんです。当時の動物学の専門家が、その知識に基づいて実にリアルな嘘をついたので、生半可な知識の持ち主ではとても突っ込めません。逆に言うと、現実にあった現象や出来事について話す場合、どこか分からないことや、辻褄の合わないところがあっても不思議はないわけです。隅から隅まで全部きれいに徹底的に辻褄があう話は、どこか作り話っぽい、つまり嘘臭いんです。

ということで、『鼻行類』が出版されてから25年後に、この本をどう評価したらよいのかということも含めて、一種の解説本が出ました。そこには『鼻行類』が引き起こした社会的な反響についても、報告されています。

田原：へー！すごい！

閑田先生：『シュテュンプケ氏の鼻行類』という本です。面白いので、『鼻行類』と併せて、ぜひ読んでみてください。とくに『鼻行類』の方は、勧めるときに「これは嘘だよ」と予め説明していても、読んでいるうちに「でも結局は、本当にいたのですよね」とか「あれ、やっぱりいなかったのかな？」と訳が分からなくなる人が続出しました。何しろドイツをはじめとしたいくつかの国の博物館には、いなかったはずの鼻行類のはく製や骨格の標本が展示されているくらいですから。

田原：『鼻行類』、すごい気になります(笑)。

小澤：閑田先生は、嘘のはなし、というか、フィクションが好きなんですか？

閑田先生：世の中、フィクションだらけだと思っています。1 + 1 = 2 というのも、実はフィクションです。

小澤、田原：え、どういうことですか？

閑田先生：1 + 1 = 2（と言いながら、紙を1枚ずつ見せる）。こっちの1枚とこっちの1枚を合わせて2枚、とみんなは信じています。でも、こうすると（と言いながら2枚の紙をくしゃくしゃとまとめる）、ほら、1 + 1 = 1 になりました。それから、十進法だと1 + 1 = 2 ですが、二進法だと1 + 1 = 10 ですよ。

田原：確かに。

閑田先生：だから、結局は「物語」なんです。1 + 1 = 2 という答えを導き出す十進法も、一つの物語の枠組み、つまり「作り物」なんです。

他の例を出してみましよう。教科書には「事実」が書かれていると思いますか？でもね、私たちが使った教科書と、皆さんが使っている教科書では内容が異なっています。私たちが中学生や高校生頃は、生物はアメーバのようなシンプルな形から、徐々に複雑化していったと教わっていました。ところがその後、「バージェス頁岩」という地層から様々な化石が見つかり、古生代からアノマロカリスのような複雑で奇妙な形状の生物がたくさん存在していたことが分かりました。それで、皆さんの生物の教科書には、カンブリア紀の生物として、アノマロカリスやハルキゲニアといった、怪しみたいな、不思議な形状の生物がたくさん紹介されていたでしょう。かつては事実だとされていたことも、新事実が見つければ、実は思い込み——フィクションだったということが証明されます。

田原：シェイクスピアとかもそんな感じじゃないですか？本当にいたのかみたいな議論されてますよね。

小澤：複数いたんじゃないか、とか。

閑田先生：そうそう。過去は記録から類推して作り上げるものですから。

もっと身近な例だと、誰かが「あいつは嫌なやつだ」と言ったとします。でもそれは単に、その誰かが「あいつ」と仲が悪いから「嫌なやつだ」と思い込んでいるだけなのかもしれない。他の人たちからすればものすごく「良いやつ」なのかもしれない。そもそも人の性格は一人一つというわけではないと言う人も

います。一人の人間に実は様々な性格があって、Aさんと話してる時はこの性格が出てきて、Bさんと話してる時は別の性格が出てきているというような考え方もあります。だから、「あの人はこういう人だ」と言った瞬間にそこには一つの物語ができています。ところで、10年前の今日、朝ごはんに何を食べたか覚えてる？

小澤：いや、覚えてないですね。

閑田：じゃあ、今朝、家のドアを右足から出た？左足から出た？

田原：いや、どっちだろう……。

閑田先生：という具合に、人間は、どうでも良いと思うことには注意を払いません。言い換えれば、人間は大事だと思うことにしか注意を向けない傾向があります。仮にそれほど大事ではないことにその時は一瞬、注意を払ったとしても、すぐに忘れず。現実にはあり得ませんが、仮定のはなしとして、びっくり同じ人生を歩んだ二人の人間がいたとします。一方の人は、幸せな思い出を大切に作る人なので、楽しかったことや幸せな時のことをたくさん覚えていて。もう一人の人は不幸な出来事からこそ人は教訓を得られると考えていて、いやな経験ばかりを覚えている人です。それで最初の方は「私の人生は幸せだった」と言うし、後の人は「私はつらい人生を送ってきました」と言います。こう考えると、私の人生はこういう人生でしたという話も、ある種の物語なんです。

小澤：なるほど。物語は身近にあるんだなって思いました。

閑田先生：そう、物語はとても身近にあります。世の中は物語で満ち溢れていて、私たちは物語なしでは生きていけません。タンポポが咲いてる時に「わあ、きれい！」と思う人もいるし、「うわ、雑草が生えてきちゃった、抜かなきゃ」と思う人もいます。そして一度、「タンポポは、抜いても抜いても生えてくる邪魔な雑草」という物語にとらわれると、「わあ、きれい！」という見方をすることが難しくなります。でも、人は何らかの価値判断をせずには生きていけないので、みんな物語の中で、物語にとらわれて生きています。

田原：哲学的ですね……。

小澤：「物語」を身近に感じやすくなりました。生活の一場面として物語が常にあると考えると、最初に私が質問した「物語にどうやって入っていけばいい

かレポートとなるととても大変。だから授業がない週末にも勉強するんですが、勉強していると寮の友人に「何で勉強してんだ。週末をもっと楽しめ」みたいな感じで言われるんですよ。こっちはそんな余裕がないのに。

鈴木：結構予習とかしないと置いてきぼりになってしまうんですか？

一條先生：そうですね。向こうの教科書は分厚いんですよ。しかもハードカバーで。日本の子供向けの図鑑みたいな感じ。そういう教科書をみんなリュックサックに何冊も入れて背負っているんです。

鈴木：移動も大変そうですね(笑)。

一條先生：僕と同じように交換留学で来ていて、文学を専門にしていた日本人の知り合いは、何百ページある小説を次の授業までに読まなければいけなくて、ヒーヒー言っていました。とにかく向こうの授業は予習が大変でした。

鈴木：文学を取ってる人は、とおっしゃっていましたが、授業は自分で選べるんですか？

一條先生：そうです。僕は英語学専門なので認知言語学や心理言語学などの授業を受けました。心理言語学はその時初めてだったので、基本的な内容から勉強しました。あと面白かったのは日本語学の授業。外国人から日本語学を教わりました。日本語の受け身文は3種類あるとか。気がつきませんでした。言われてみれば確かにそうだと思います。あと日本語の「ん」の発音は5、6種類あるとか。意識しません？

鈴木：5種類！？意識しないですね、パッと来ないです(笑)。

一條先生：例えば「新橋」や「神保町」の「ん」は、直後に両唇音の[b]が来るから、発音が[m]なんです。「新幹線」の「しん」は後ろに[k]が来るから[n]になったりとか。一番驚くのは「新聞」の「しん」は[m]だけど、「ぶん」は後ろに母音がくるから[u]なんだそうです。日本人だからといって、日本語を知ってるわけではないんです。

鈴木：そうなんです、言語の奥深さがよく分かりませんね。

一條先生：だから、逆に英語母語話者は無意識に使っているから英語を分析的に知らないかもしれません

が、我々日本人は英語を客観的に見ることができるんですね。

鈴木：分かりました。楽しかったことは今おっしゃった日本語学の授業などでしょうか？

一條先生：そのほかに楽しかったことは、英語でジョークを言って外国人を笑わせることを目標にしていたことでしょうか。ジョークはひねりを入れたり、ウィットを効かせたりして、しかもタイミング良く瞬時に言わないといけないから、普通の会話よりも高度じゃないですか。だから英語でジョークが言えるくらいに頑張れば、英語の力も上達するかなと考えました。そこで、海外のコメディドラマ*Friends*のDVDを友達から借りて練習しました。でもいざ実際にジョークを言おうと思っても、どう言ったら面白いかなと色々考えてるうちにタイミングを逃しちゃうんですよ。数秒たって「ああ言ったら面白かったのにな」ということがしょっちゅうありました。ハロウィンの時期に、寮のキッチンで、ある女の人がカボチャの顔を掘っていたので、そこで何かジョークを言おうと思ったんですよ。ちょうど鼻のところを掘り終わった所だったので、カボチャのセリフとして、“Now, I've got a nose! I can smell pumpkin around here. (ついに鼻が付いたぞ！おや、なんだかこの辺でカボチャの匂いがするぞ。)”と言ったんですよ。これは自分でもアメリカンジョークっぽいし、タイミング良く言えたから、爆笑間違いないと思ったのですが、その人は「ふふっ」で笑っただけでした。これだけ頑張って「ふふっ」だけか、と思いました(笑)。つまらなかったのか、伝わらなかったのか分かりませんが。こんな感じで「ジョークを言ってネイティブの人を笑わせようと挑戦していたこと」が楽しかったことかもしれません。今でもネイティブの人をジョークで笑わせようと頑張っています。

鈴木：そうなんです、頑張ってください(笑)。そうしましたら少し話は変わるんですが、意味論を専攻しようと思った理由を教えてください。

一條先生：大学受験の時に、ある予備校の先生が「haveの基本的な意味はこういうイメージだ」とか、「前置詞のinはこういうイメージだ」のように教えてくれて、そこから英語が面白いと思うようになったんです。そして、大学に入ってから、英英辞典に書いてある意味を参考にして、基本動詞や前置詞について自分なりに図や中心的意味などを情報カードに書いてまとめてました。4年生になって、日本言語学会主催の夏期講座に参加したんですよ。日本各地から言語学を研究する大学生や大学院生などが合宿所にやってき

て、著名な先生による音韻論、生成文法、語用論などの授業を5日間くらい受けるんです。その中に意味論の授業があって、それが面白かったんですね。その時に前置詞 in や on の中心的意味の話などもあったから、僕が1~2年生の時に情報カードにまとめていたのは、意味論という分野なんだと初めて知ったんですよ(笑)。

だけど4年生の時は音声学で卒論を書いたんです。その時は音声学にも興味があったので。英会話の基本はまず発音だと思っていたから、1年生か2年生の時に受けた「英語音声学演習」の *Better English Pronunciation* というテキストを参考に、発音記号1個1個について口の断面図や発音の仕方をルーズリーフにまとめました。卒論は、なぜ日本人は th の /θ/ や /ð/ の音を、[s] や [ʃ]、[t]、[d] などの音で代用するのかというテーマで書きました。ある発音の本に付属していた音声分析のソフトを使いました。マイクに向かって話すとパソコンの画面にスペクトログラムという図が表示されるんです。卒論の結論は極めて単純で「音が似ているから」でした(笑)。でも4年生の時にさきほどの夏期講座に出て「意味論って面白い」って思い、また大学院に入ってから意味論の先生が英文学科にいらっしゃったので、その時から意味論を本格的に勉強しました。

鈴木：なるほど、その意味論の中でもメタファーやメトミニーといった日本語でも考えられる現象を授業でわざわざ英語の教材で勉強することに特別な意味はあるんですか？

一條先生：それは単純に英文学科だからです(笑)。英文学科だから、英語を読んで英語の力を身につけてほしいことと、英語と日本語の違いも探りたいということで。英語で用いられるメタファーが、日本語にもそのまま当てはまるとは限らないですからね。例えば言葉のやり取りについて、英語では考えを言葉という容器(固体)に入れて相手に伝えるみたいにとえるんですが、日本語は言葉を液体としてたとえる傾向があるとされます。「優しい言葉をかける」とか、「秘密を漏らす」とか、「噂が流れる」とか。

鈴木：ああ、たしかに…

一條先生：まあ日本語でも「質問をぶつける」みたいに固体っぽく言うこともあります。

鈴木：「投げかける」とか？

一條先生：そうですね。英語の読解力もですが、英語と日本語の比較ができるかなと思って英語の教材を

使っています。

鈴木：なるほど、わかりました。では最後に好きな前置詞とその理由を聞いてもいいですか？

一條先生：好きな前置詞なんてないですよ(笑)。

鈴木：ないですか？(笑) まあ「好きな」が難しかったら「あっ、この前置詞面白い！」と思ったことがある前置詞でも大丈夫です。

一條先生：えー、好きというか面白いのは at でしょうか。

鈴木：at？

一條先生：うん、at は難しいですよ。

鈴木：去年も英語意味論演習の後期の授業でやりましたね。

一條先生：やりましたね。in とか on は図が書いて分かりやすいじゃないですか。at についても、授業では「点」を表すといって一応図を書いて教えたかもしれませんが、そんな簡単なものではないと思っています。例えば、“The swivel chair is at the table. (回転椅子がテーブルの所にある)”は適格だけど、“*The refrigerator is at the table. (冷蔵庫がテーブルの所にある)”は不適格だという例がありましたね。at は、何でもそこにあればいわけじゃなくて、特別な機能的な関係がないといけないんですね。椅子と机は仕事などの作業するために用いられる機能を持つ関係にありますね。

鈴木：なんかセットで使われるイメージみたいな話をしていらっしゃいましたよね。

一條先生：そうそう。でも冷蔵庫とテーブルにはそのような機能的な繋がりが無いから、at は使えないんでしょうね。単に空間的な位置関係だけじゃなくて、深い意味があるのかもしれない。ということで、面白いと思う前置詞は at です。

鈴木：わかりました。インタビューは以上です。お忙しい中、本当にありがとうございました。

《エッセイ》

エクセターから

日本大学国際関係学部准教授 杉本 宏昭

ある先生から BAVS (British Association for Victorian Studies) への入会のお誘いがあった。2018年のことである。この学会だが以前から入会を考えていた学会で、この先生の一言が後押しとなった。さっそく参加してみた。この年の学会はエクセター大学で開催され、発表で一番聞きたい内容はエクセター大学に所属するトマス・ハーディの専門家のものだった。発表を聞いた後、もしサバティカルのOKがでたら受け入れてくれないか、と初対面ながらお話し、了解をいただいた。

エクセターがあるのはデヴォン州、デヴォン州はドーセット州のとなり、そしてドーチェスターは私が研究するトマス・ハーディの舞台である。私が勝手に第2の故郷と思っているドーチェスターにすぐに行きたい、これもエクセター大学にした理由の1つである。

スルスルと話が進み、2020年3月に出発の予定だったが、COVID感染が拡大し、1年半かけた準備が出発2週間前ですべて泡になった。今回の滞在は2024年3月から1年間の予定。

日本からわざわざエクセターに来る人は少ないだろう。短期間での旅行のコスパを考えたらロンドン近郊の方が良い。確かに大学に日本人はいる。極めて少数だが。エクセター市には在住者も。こちらもまた多くはない。街なかで日本人を見かけることはほぼ奇跡。エクセターの町はとても歴史ある町。しかしその素晴らしきストーリーの紹介はネットに任せたい。というよりもこの素晴らしさはここでは書ききれない。

Blue Plaqueめぐりもできる。細かい地理的なこともmapに任せよう。その他生活情報：ロンドン・バディントン駅から乗り換えなし。電車も支線が伸びる町。ヒースロー空港から直行バスあり。地方バスの起点。この町で生活のすべてがそろう。「わざわざ・・・」の必要は全くない。確かに細かな事件はある。しかしとても穏やか町。住人は外国人に寛容だ。笑顔で声掛けしてくれる。

エクセター大学の基本情報もネットに任せたい。なぜなら学科もコースも人もあまりに多いため。この大学はラッセル・グループの研究大学である。国内また国外でもその知名度は「非常に」高い。もちろん留学生準備コースも万全。キャンパス、どれほど広いんですか？噴水、庭園、リス、美しい花、鳥。朝の空気は透き

通っている。森の小道も立派な近道。木々は樹齢「？」、毎回パワーもらう。

エクセター大学に来たらやりたかったこと、「図書館に籠る」。そしてやりたいことをやりたいようにしている。国際関係学部に所属するせいか、文学+αが私のお気に入り。特に視覚文化の視点からハーディ文学を考えたい。例えば絵画や写真など。ハーディは建築業を営む家系の出身で、自身は建築家として身を立ようとしていたこと、英文学史でも有名な話である。建築とハーディはゴシックリバイバルの点で多くの論文があるが、この点だけがすべてではない、という大きな研究計画を立ててみたものの、なかなか歯ごたえある領域である。24/7でオープンな図書館。建物内にコンビニあり。もはやシャワーの無い巨大な家。いつもの机の真後ろが文学の書棚、圧倒的。読みたい最新資料のダウンロード可能。タブレットとペンは必須。学生はいつもPCで何かを打っている。おそらく3000字の課題であろう。数百ある座席はいつもいっぱい。しかも静か。キーボードを打つ音以外は。

《検定試験奨学制度》

資格自体を目的にしない

日本大学文理学部英文学科4年 古畑 走

この度、TOEICにて900点を取得したことに伴い、検定試験奨学制度を申請させていただきました。以前より英語力を確かめるためにTOEICを受験しており、今回もその一環で受験しました。ただ、就職活動の時期だったこともあり、自身のアピールポイントとして役立ったことは事実です。TOEICは就活に役立つとよく言われますが、私の場合はスコアそのものよりも、長年継続して取り組んできたことが評価された印象があります。初めての受験は中学3年生のときで、それ以来、年1回のペースで受験を続けています。英検と違って合否ではなくスコアのみが出るため、明確な目標を設定しなくても良い(ぼんやりと前回は越えたいとは考えています)という気楽さが、ここまで続けられた理由です。タイトルにも書きましたが、検定試験の合格を目的にすると、達成できなかったときのダメージが大きく、挫折しやすいので、もっと気軽に考えることが継続のカギです。

次に私の試験準備について、まずは普段の英語学習についてからお話します。小学生のときは英会話教室に通っており、中学時代はグローバル教育に

力を入れている学校に通っていたため、基礎的な英語力はそこで身につけました。最近では、その基礎をもとに英語学習を趣味に組み込んでいます。私はゲーム実況動画の視聴やトランプポーカーといった趣味を持っているのですが、これらのイベントは海外で盛んに行われている、もしくは多くの視聴者が集まる夜間が中心です。しかし、大学生は空きコマなどで昼間に時間を持て余すことが多いでしょう。そのため、時差を利用して、海外のゴールデンタイムの生放送を視聴することが私の英語学習になっています。趣味を楽しむ時間を増やすために時差を利用したいので英語を勉強するというのは、我ながら良い考えだと思っています。

次に、TOEICについてですが、先述のように受験目的はあくまで実力確認であるため、特化した学習はほとんどしていません。強いて言えば、必修科目の英語7・8の履修ぐらいです。一番役立っているのは、定期的に受験して積み重ねてきた経験です。TOEICといえば、頻出単語や問題のシチュエーションはビジネス関連のものが多いですが、確実に中高生のときよりは社会についての理解が深まり、解きやすくなっています。長文問題も、先に小問を読んで文章のどこに情報がありそうかを推測するのが得意になってきました。私は年1回のペースで受験していますが、TOEICは実施回数が多いので、今からでもかなりの経験値を積むことができると思います。即効性のある学習法というよりは、趣味など他のものと絡め、ひたすら経験を積み重ねて行うものが効くと考えています。

検定試験にあまり意識を持っていない方も、ぜひチャレンジしてみてください。図書カードや単位認定がもらえたらラッキーぐらいの動機でも良いと思います。私自身もあまり大きい声では言えませんが、英文学会に入会した理由は複数ありますがその一つに検定試験奨学制度に申し込むためという邪な考えもありました。資格の役立て方は取った後からでも考えることができますが、何らかの理由で資格が欲しいと思ったときにそれがスムーズに手に入るとは限りません。検定試験に限らず、何事も早め早めの行動が吉です。



《海外留学体験記》

カナダ留学を終えるにあたって

日本大学文理学部英文学科4年 萩原 絵理香

私は現在カナダのトロントに留学しており、こちらに来て半年が経ちました。私が留学をしたと思ったのは中学一年生の頃で、英語学習を始めてから今も英語が大好きです。高校で英語を学んでいく中で「大学生になったら必ず留学をする!」という思いが強くなり、英語学習を継続していました。しかしコロナウイルスの影響で大学の留学プログラムが取り消しになり、大学三年生を迎えた時、「このままで本当にいいのだろうか」と考えながら時間だけが過ぎていきました。沢山悩んだ末やはり諦められず、四年次を休学して留学をしようと決意しました。

私が留学先になぜカナダのトロントを選んだかについて振り返ろうと思います。人気な留学先として知られるカナダですが、私は治安の良さと綺麗な英語という点に着目しました。またバンクーバーやモントリオールではなくトロントを選んだのは、トロントアイランドという場所から見えるCNタワーとビルの町並みの写真を見たとき既に惚れ込み、自分がそこで過ごす光景を想像できたからです。実際場所により治安はあまり良くないですが、一度も帰りたと思ったことはありません。むしろ長年の夢がやっと現実になり、カナダの国旗や飛行機を見るたびに「来て良かった」と本当に思います。だからこそ辛いことがあっても全て乗り越えられている気がします。

この留学での一番の思い出は、トロント大学のサマープログラムに参加したこと。留学について考え始めたときからトロント大学に興味があり、語学学校で英語力をつけてから参加できるなら自分にとって良い経験になるだろうと思い、語学学校での勉強も一層力を入れました。私はAcademic EnglishとCulture & Communityのコースを受け、国籍や年齢、職業も様々なクラスメイトと共に学びました。大学の授業に限らず語学学校でも授業はディスカッションがメインで、留学当初は意見を聞く側でしたが、サマープログラムに参加する頃には積極的に意見を出し、生徒と教授で授業を作る環境が有意義であると感じるようになりました。またこのサマープログラムでは、勉強だけでなくトロントの観光イベントもほぼ毎日開催され、クルーズ船に乗ったりCNタワーから夜景を見たりと良い思い出になりました。そしてプログラム最終日にはトロント大学の修了証をもらい、プログラム参加者全員でのパーティーもありました。Culture &

ない三世の語りとは、史実に対する不確定な認識という非難をあびながらも被害言説から逸脱し、アメリカ国内におけるエスニック文学とは異なる見解を日本および日系収容にあてることにもなる。

このことに加え『三世と多感』というタイトルからもわかるように、本短編集はジェイン・オースティンという19世紀イギリス文学の巨匠のフレームを使用している。オースティンの『分別と多感』は、ダッシュウッド家の二人の娘、理性的な長女エリナーと情熱的な次女マリヤンの恋愛の行方とその後の結婚を綴ったものであり、エリナーの体現する「分別“Sense”」とマリヤンの「多感“Sensibility”」の二つのプロットにより、ロンドンから離れた地方中流階級の女性の姿が描かれている。家父長的な社会において貞淑に生きる伝統的な姉エリナーに対し、妹マリヤンは自分が欲するものを手にいれるという19世紀の近代的女性像を示唆している。これを日系アメリカ的フレームに入れ込むならば、エリナーとは苦境に堪え堅実に生きる日系二世となり、マリヤンとは70年代に自分の感情の思うままに天真爛漫に生きる三世ということになるだろう。

『三世と多感』所収のヤマシタのチーティング・シートにはオースティンの作品を上げて、本短編集後編に当たる「多感」において、どの短編がオースティン作品のどれをパロディにしているかが明記されている。しかし私は本作全体が（すなわち前編の「三世」に所収されている作品群も含めて）このオースティンの「分別」と「多感」に分類される二つの主体とその交錯の構造を感じることができると考えている。たとえば「紳士協定」といった一世女性に焦点をしばりアメリカとブラジルの世紀転換期の歴史に焦点を絞ったものでさえも、オースティン的な構造がみうけられる。日系三世同志の対話という形式において、ヤマシタは南米ブラジルの視点をもその語りとして想定し、日本という国の多角的解釈を展開する。1907年から1908年に結ばれた対米移民制限に関する不文律である「紳士協定」をテーマにした本短編は、明治生まれの移民一世女性がどのように存在しえたのかということ、アメリカ（カレン・テイ・ヤマシタ）そして彼女の友人であるブラジル（レチオ・クボ）の日系三世同志が対話形式で語る。写真でしかわからないこの日系三世の祖母たちは、紳士協定が南北アメリカに与える影響とともに、様々な形でその語られない側面を露呈していくことになる。そしてその日系性とはアメリカでは迫害されし民族—「分別」—として、一方ブラジルでは特権階級—「多感」—として生きる日本人移民の姿が語られる。また対話形式であるため、前の話者の話を受けて、次の話者がそれとは異なった色合いを話に添えるというスタイルになり、この語りとは、あのジェフリー・チョーサーの傑作『カンタベリー物語』を喚起させられるほどである。

英語圏日系文学とは日本の英文学科で積極的に紹介されるべき分野であるにもかかわらず学生たちはその存在自体を知らないことが多い。私たちの知らない日本とアメリカの関係を描くこの作家の功績と今後の活動を紹介、解説するのが私の使命と思っている。そうした意味でも『三世と多感』は日系文学を知る上での第一歩と考えていただければと思う。



『Rによる教育・言語・心理系のためのデータサイエンス入門』 (オーム社、2023年)

法政大学理工学部准教授 柳川 浩三

自分の立てた問いに自分でデータを集めて答えを見つけ出すのは楽しいものです。しかし、その過程で通らなければならない統計分析は、多くの文系学生や研究者にとっては厄介なものではなかったでしょうか。私にとってもそうでした。実際、さまざまな統計に関する本を読めば読むほど無力感を強くしてきました。

本書は文系著者による文系読者のための本です。したがって、数式をほとんど使わずにスキル（実践）と理論をツナグことに注力しました。具体的には、以下の3点を工夫しました。第1に、各章ごとに設定した研究課題を達成する手順を図解したことで、読者は分析を始める前に最後まで道のりを俯瞰し、安心して分析を続けられます。第2に、理論的説明は詳しくすぎず、薄すぎず、ちょうどいい塩梅（あんばい）を狙いました。読者が本書の研究課題と自分のそれとを照らし合わせることで、自分のデータの分析方法を選択し、解を見つけられるようになることを優先したからです。第3に、R操作上の読者の躓きとストレスを極限まで抑えました。Rを扱う際に頻出するトラブルとその対応策を一覧にまとめたのもその一つです。

本書は、全3部、14章で構成され、文系の研究者や大学生が必要な統計手法はほぼ網羅しています。第1部では2変量の量的分析、第2部では質的分析、第3部では多変量解析を扱います。特に第2部では頻度数（割合）の検定で多用されるカイ二乗検定と残差分析を学び、さらに、その結果を2次元で可視化し理論化を試みる対応分析まで読者を導きます。これらの手法により、英文学・英語学研究の分野で伝統的に用いられてきた記述的な分析法を発展させ、統計的に吟味する

ことで結論と考察に説得力を持たせることができます。第3部は、重回帰分析、ロジスティック回帰分析、因子分析、クラスター分析を学びます。研究の幅を広げてくれる応用的な分析技法をどうぞお楽しみください。

Rがややとつきにくいのは事実です。しかし、自分でコマンドを打ち、アウトプットを読み取るプロセスは、自分の足で自分の道を歩いている実感に満ちています。そして、それが自分の論文やレポートのオリジナリティを支え、自分自身の研究に対する自負と責任を育んでくれます。この本を手にとった皆さんが、自分の武器の一つとして統計知識とRスキルとを携え、昨日の自分よりもまた一つ成長したと思ってもらえたらうれしく思います。

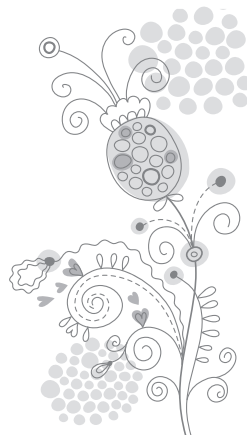
以下、読者お二人のレビューです。皆さんと誌上でお会いできるのを楽しみにしています。

Yujiさん

巷ではデータサイエンスに関する書籍が溢れている。しかしながら、学部生や大学院生が、研究のために実際に「使う」ことを目的にした書籍は数少ない。本書はその数少ない書籍のなかの1つである。平均の求め方のような基礎的な手法から、ロジスティック回帰のような応用的な手法まで、丁寧な記述がなされている。これから論文を書こうと尽力している学生たちにとって、論文が雑誌や学会誌に受理されるためのお役立ちアイテムになるだろう。

kuさん

この本は、各統計技法について具体例を交えながら丁寧に説明してくれているので、実際に自分の研究でどう活かせるかがとてもイメージしやすい内容になっています。また、統計の説明もすっきりと簡潔で、他の本と比べても分かりやすく、すぐに使える実用的なものだと感じました。例として紹介されている論文も理解しやすいので、読んでいてイメージを膨らませやすいです。



《年次大会プログラム》

日本大学英文学会 2024 年度 学術研究発表会・総会

日 時：12月14日(土) 13:30より
場 所：日本大学文理学部3号館4階3405教室

休 憩：17:00～17:10(10分間)

会長挨拶：吉良 文孝(文理学部教授)

総 会：17:10～17:40

司 会 前島 洋平(文理学部准教授)
[会長挨拶] 吉良 文孝(文理学部教授)
[会務報告] 村岡 宗一郎(文理学部助手)
[会計報告] 一條 祐哉(文理学部准教授)
会則改定
役員改選
そ の 他

学術研究発表会：13:35～17:00

●文学の部：13:35～14:55
司 会 野村 宗央
(松山大学経営学部特任准教授)
[発 表] 1. 川崎 和基(工学部准教授)
2. 松本 美千代(国際関係学部教授)

懇親会：18:00～20:00 カフェテリア秋桜にて
司 会 黒澤 隆司(日本大学第二高校教諭)

休 憩：14:55～15:10(15分間)

懇親会費 研究会員：5,000円
学生会員・大学院生：2,000円
同窓会員：無料

●語学の部：15:10～17:00
司 会 佐藤 健児(法学部専任講師)
[発 表] 隅田 朗彦(文理学部教授)
[最終講義] 吉良 文孝(文理学部教授)

※懇親会に参加予定の方は本学会メールアドレス(esanu02@gmail.com)にご連絡、あるいは学会HPに掲載されているGoogle Forms(右記QRコードも可)より必要事項をご入力ください。



《年次大会発表要旨》

Heaven and Hell—Perkins,
Milton and Overton

日本大学工学部准教授 川崎 和基

Heaven(天国)とHell(地獄)はどこにあるのか。天国は、聖人と天使が賛美する神の住処であろうか。あるいは聖人が住む楽園なのであろうか。そして、地獄は、墮罪により神に離反したものが、天使であれ人間であれ、その罪の咎を負うため永久の住処と定められ、墮とされる場所なのであろうか。

墮罪前にアダムとイブが暮らしていた場所が楽園だ

とすれば、墮罪後にその楽園はどこにあり、一方、墮罪により神に離反したものが墮とされる地獄はどこにあるのであろうか。

ジョン・ミルトンの『失楽園』(Paradise Lost)では、天国、楽園、地獄が描かれており、これらの問いへのミルトンの神学観がこれまで議論されてきた。特に、ミルトンは『キリスト教教義論』で「不可視の天国」(“the invisible heaven”)が、天地創造前に、創造されたと考え、それは、『失楽園』第3巻で描写される天地創造でも符号しており、議論の対象となってきた。さらに、『失楽園』第7巻において、不可視の霊の存在を可視化するため身体になぞらえて天について説明するラファエルの言葉にあるように、「不可視の天国」が可視化されていることも見逃せない。

本発表では、『失楽園』における「不可視の天国」を手がかりとして、ミルトンの描く天国、楽園、地獄について、ウィリアム・パーキンスの『金の鎖』(A Golden Chain)とリチャード・オーバトンの『人間の必滅』

(*Mans Mortalitie*)の主張とともに検討し、それらが当時の主流とどのような差異があったのかを明らかにしたい。

作文学習における訂正フィードバックの効果：文法エラーの属性による効果の影響

日本大学文理学部教授 隅田 朗彦

現代アメリカ演劇から見るアメリカ

日本大学国際関係学部教授 松本 美千代

アメリカ演劇における受賞作品は、社会的、政治的な問題や多様な文化的アイデンティティをテーマにしていることが多い。ピューリッツァー賞とトニー賞は、その年の最も話題となった重要なテーマや芸術的に優れた舞台作品に与えられる賞であり、観客動員数にも大きな影響を与える。また、ピューリッツァー賞はより文学性の高い作品に授与される傾向があり、トニー賞はミュージカル作品賞、最優秀脚本賞、最優秀演劇賞、最優秀俳優賞、リバイバル賞など多くの部門に分かれて、それぞれの特徴を反映する。そこで、今回の発表では、ピューリッツァー賞とトニー賞受賞作品の全体の傾向を総観した上で、2023年と2024年の受賞作品の位置づけについて考察する。

伝統的にアメリカ演劇では、家族の状況がアメリカ演劇の主要な主題とされてきた。しかし、近年の受賞作品には、家族の在り方の多様化を反映し、個人のアイデンティティを通じて人種や民族、ジェンダーにおけるマイノリティが抱える葛藤や社会的・政治的問題を描いたものも増加している。全体的な主題の特徴としては、社会的・政治的な問題、多様な人種や民族、移民、セクシュアリティを扱う文化的アイデンティティ、経済的な衰退による労働者階級への影響、複雑な家族関係、孤独や精神疾患、女性のエンパワーメント、また歴史的出来事や、過去の文化的書籍や映画のリメイクを通じた価値観の再定義などが挙げられる。

アメリカ演劇の受賞作品は、単に舞台として楽しむだけでなく、社会問題への批判的な思考や多様な価値観に対する寛容性を促している。演劇は、観客が現代社会の複雑な問題について考える機会を与えられる場として存在している。社会の変化や時代の新しい文化的価値観の提示を通じて、最新のアメリカ演劇がどのように社会と関わり、影響を与えているのかについて考察していく。

教師に作文を添削してもらった経験がない方はおそらくほとんどいないであろう。特に外国語としての英語学習において、添削は古くから行われている指導・学習活動であり、むしろ、母語よりも外国語の作文添削の経験の方が多いかもかもしれない。しかしながら、古くからおこなわれている添削、つまり、エラー訂正フィードバックの効果を多くの研究者が検証し始めたのは1970年代後半になってからにすぎず、訂正フィードバック研究の歴史は極めて浅い。ただし、そのような浅い歴史の中でも、学習環境、学習者の熟達度、誤りの属性、訂正フィードバックの属性など、様々の変数を考慮に入れた訂正フィードバックの効果が多くの研究で検証されている。訂正フィードバック研究の初期の段階（1980年代から1990年代前半）では、学習者が作文のエラーを修正するために、どの程度フィードバックが有用かを検証する研究が大半を占めていた。つまり、フィードバックによって生徒の作文がどう改良されるのかが焦点となっていた。しかし、1990年代半ばごろからいくらフィードバックが作文の改良に効果的かが分かって、果たしてそれが学習者の文法力や語彙力の発達、つまり、言語の習得に貢献するかどうかはわからないという批判が起こった。その後現在に至るまで、多くの研究が訂正フィードバックの効果をこのような言語習得の観点で扱うようになり発展している。本発表は、このような訂正フィードバックの効果についての研究を大まかに概観した上で、言語習得の効果の検証を中心としたフィードバック研究のうち、文法エラーの属性と訂正フィードバックの学習への効果の関連に焦点を当て、発表者自身の研究成果を交えながら、これまでわかっていることを論じる。

〈最終講義〉

if節における認識的 will について (再び)

日本大学文理学部教授 吉良 文孝

今から 37 年前の 1987 年 4 月の話です。本学大学院の博士後期課程 2 年であった私は、4 月例会において、「条件文および副詞節における法助動詞のふるまいについて」と題する研究発表をしました。研究者としての第一歩を踏み出した私にとって、生涯初の（緊張のなかでの）口頭発表でした。今と比べると、当時の月例会には随分多くの参加者がいました。司会をしてくださった音楽評論家でもあった大久保祐二先生の「聴衆は多ければ多いほどやりがいがありますね」ということばを今でもよく覚えています。

最終講義に際し、再度、if節における認識的 will の問題をとりあげることにします。

《発表要旨》

意志未来を表わす will は、if 節での使用に制限はないが、認識的 will（「推量」の will）には、その使用に制約がある。

- (1) If you will help me, I'll finish soon.
(江川 1991³: 212)
- (2) If it {rains/*will rain}, the match will be cancelled.
(Palmer 1990²: 171)
(雨が {降れば/*降るだろうなら}、試合は中止になるだろう)

(1) は「意志未来」としての will である。(2) において、rains (非モーダル) が用いられ、will rain が容認されないのは、「未来に言及していることが帰結節の内容によって明らかであるため、未来のマーカである will を if 節にまで用いる必要はない」という簡単な理屈に基づく。「ことばの経済性」(economy of speech) の立場からの説明である (Cf. Jespersen, 1924)。しかしながら、事はそれほど簡単なものではない。will の使用が義務的になる場合があるからである。次の (3) では、同じ if 節でありながら、(2) とは真逆の文の容認性を示す。

- (3) If it {will rain/*rains} tomorrow, we might as well cancel the match now.

(Cf. Haegeman & Wekker 1984: 48ff.)

([試合の大会関係者の発言] 明日、雨が {*降れば/降る (という) のなら}、現時点で明日の試合は中止ということにしたらどうだろう)

(3) における will は、Jespersen に言わせれば不経済な will の使用ということになる。しかし、H & W (1984) によれば、不経済どころか、(3) での will の使用は義務的であるという。認識的 will が if 節で用いられるその使用メカニズムはどのように説明されるのであろうか。

本発表では、この問題に関する Palmer (1974, 1990²)、Comrie (1985)、Close (1980)、Sweetser (1990)、Dancygier (1998) などに見られる言説を概観する。そして、(3) に見るような認識的 will が用いられる条件文、いわゆる、「オウム返し条件文」について、中右 (1994) の提唱するモダリティの定義にある「心的態度の発話瞬間同時性」を援用し、「主観的モダリティ」(発話瞬間的モダリティ) と「客観的モダリティ」(非発話瞬間的モダリティ) の観点から、その使用メカニズムについて説明を試みる。



《月例会関連》

●月例会予定

2024年度11月以降の行事予定は以下のとおりです。詳細が決まり次第、メールおよび、本学会ホームページにてご案内いたします。

11月 研究発表（2024年11月30日）

司会 小澤 賢司（通信教育部准教授）
発表

1. EFL学習者に対する「読み聞かせ」がリーディングの流暢さに与える効果に関する実践研究
島本 慎一郎（文理学部講師）
2. 『ユリシーズ』（1922）におけるダブル・オープニング再考—各挿活論が複数の挿活論か—
猪野 恵也（通信教育部准教授）

12月 2024年度学術研究発表会・総会（2024年12月14日）

詳細は《年次大会プログラム》をご覧ください。

《事務局だより》

●卒業された同窓会員の皆様へ

日本大学英文学会では、会員・非会員にかかわらず、卒業後は同窓生として英文学科全卒業生の個人情報とを保管しております。住所変更など、ご登録情報に変更がございましたら、学会通信目次に記載されている宛先までお知らせください。

●会費納入のお願い

2024年度学会費（研究会員4,000円、同窓会員1,000円）を同封の郵便振込で納入くださいますようお願いいたします。なお年次大会受付を含む事務局での現金による学会費納入はお取扱いできません。学会費納入には、お手数ですが、郵便振込をご利用いただきますようお願い申し上げます。

口座番号：00140-3-27474

加入者名：日本大学英文学会

※日本大学英文学会会則により、年度末時点で3年間会費未納の場合には自動的に退会となります。

●研究発表者募集

当学会では、次年度の月例会（シンポジウムを含む）・年次大会の発表者を募集しております。発表をご希望の方は、以下の情報を事務局までお寄せください。なお、検討の結果、ご希望に添えない場合がございます。予めご了承ください。

1. 氏名
2. 住所・電話番号・メールアドレス
3. 所属
4. 発表希望年月
5. 発表題目
6. 要旨（日本語400字以内、英語200語以内）

●『英文学論叢』第74巻 原稿募集

日本大学英文学会機関誌『英文学論叢』第74巻（2026年3月発行予定）の原稿を募集いたします。投稿をご希望の方は、『英文学論叢』第73巻（2025年3月発行予定）巻末の投稿規定をご覧ください。

●学生編集委員

英文学科4年	秋元	優志
英文学科4年	小澤	優月
英文学科4年	塩澤	拓幸
英文学科4年	鈴木	大翼
英文学科4年	高橋	尚吾
英文学科4年	田原	希優
英文学科4年	樋口	康平
英文学科3年	横田	涼



発行：日本大学英文学会

〒 156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com

